

○派遣期間：平成23年7月14日（木）～平成23年7月23日（土）

○派遣先：岩手県上閉伊郡大槌町

### 被災地の今

震災から4ヶ月経った被災地で共通して見られたのが“何もない平地”と“高く積まれた瓦礫”でした。自衛隊など国をあげた支援により建物はきれいに撤去されましたが、災害を繰り返さないための“これからの復興計画”という難題が、被災地では今検討されています。

また、避難所から仮設住宅への入居が進められていますが、被災者の中にはストレスによる大量飲酒やアルコール依存、義援金などの支援に頼り無気力に陥る方などが増える傾向にあり、被災者の心のケアと自立という新たな課題が出始めています。



大槌町仮設役場からの被災地の風景

### 担当した業務

私が大槌町役場で担当したのは、総合受付業務でした。総合受付には、被災者への支援制度から道案内まで幅広い問い合わせが連日あり、「広報おおつち」「岩手日報（新聞）」「住宅地図」「電話帳」などで情報を収集しながら問合せに対応しました。4ヶ月経った今でも家族や友人からの安否確認のための問い合わせが多いことに驚かされましたが、行方不明者を探す方々は、震災から心が休まず日常的に問い合わせ続けているという状況を知り、検索には時間がかかっても正確に行うことを心がけました。親友の安否を確認するために千葉から年賀状を握りしめて窓口に訪れた夫婦がいました。友人のご健在を確認し無事に窓口の電話で再会を果たすことができ、夫婦で受話器を順番に手に取り声を震わせて話をされている姿にこちらも嬉しくなりました。



グラウンドに建てられた大槌町仮設役場

「住宅見舞金の申請を断られた」と泣きながら苦しい生活や公務員に対する批判を1時間近くされた女性もいました。申請を受けた担当に確認したところ、審査中に断られたと“勘違い”されて帰ってしまったことが分かり、電話で説明し見舞金を受け取っていただくことができました。穏やかで明るいこの地域の人たちも、二重住宅ローンや医療、子どもの教育環境などで切実に悩まれていることを知る機会となりました。



## 被災地で見えてきたこと

沼津へ戻ってからもしばらく沼津の風景が被災地の風景と重なって見える日々が続きました。海までつづく何もない平地、無造作に転がった堤防、道路に乗りあげた大きな貨物船。災害を防ぐという防災の考え方から、災害の被害を最小限に抑えるという減災の考え方へ計画だけでなく私たち一人ひとりの意識も大きく変える必要があると感じました。

そして被災時の行政が果たす役割について改めて考えさせられました。大槌町が他の地域に比べ復興が遅れているのは、庁舎自体が被災したことに加え町長を含む多くの職員を失い行政機能が著しく低下したことが一因だと言われています。また大槌町には、多くのボランティアや自治体職員が集まり支援が行われていましたが、自衛隊が7月末に撤収し、他の支援活動も順次終了していく中で、自分たちの町の復興計画を自ら描き実現に移していく体制が自治体に求められています。被災時には行政機能を維持することが大切であること、またその地域の復興のスピードは、自治体を中心になって行なう復興のための体制づくりに左右されることを痛感しました。(大槌町では、震災から不在となった町長選挙が8月28日(日)に行なわれる)

最後に、被災地での直接の業務と異なりますが、静岡県支援チームとして県職員や他市町職員と業務をともにし、防災や仕事に対する考え方や取り組む姿勢に大きな刺激を受けました。この経験を防災に限らず沼津市の業務で生かしていきたいと考えています。



静岡県支援チームの業務後ミーティング



日々変化する業務量に合わせて派遣職員を調整



総合受付業務を行った仮設建物



様々な組織によって行われていた支援





多くの犠牲者が出た大槌町役場



無造作に転がった堤防（大槌町）



道路にせり上げた貨物船（釜石市）



花が供えられた消防自動車（大槌町）



集められた瓦礫の山（陸前高田市）



水が引かなくなった平地（陸前高田市）



お世話になった大槌町役場の職員の皆さん



元気な笑いで被災地を勇気づけていた「菜の花プロジェクト」の金山さん（写真右）